

■資料・翻訳

## 力強い「子どものイメージ」：レッジョ・エミリア・アプローチの原理 (翻訳と解説)

山本 理絵<sup>\*1</sup>  
原 明子<sup>\*2</sup>

Translation and Commentary  
Sydney Gurewitz Clemens, "A strong Image of the Child:  
Bedrock of the Reggio Emilia Approach"

Rie YAMAMOTO  
Akiko HARA

Sydney Gurewitz Clemens と Leslie Gleim の著書『新しい目で幼児を見る—レッジョ・エミリアから子どもたちや自分自身について学んだこと』(*Seeing Young Children With New Eyes: What we've learned from Reggio Emilia about children and ourselves*, 2013) の「第1部 子どものイメージ」の「第1章 力強い『子どものイメージ』：レッジョ・エミリア・アプローチの原理」を以下に翻訳し、解説する。

### 〈翻訳〉

レッジョ・エミリアの考え方の旅(探究)は、私たちが、どのように子どもに目を向けているかを吟味することから始まる。レッジャーニによると、力強い「子どものイメージ」が、レッジョ・エミリア・アプローチの哲学の基礎であり、それによって、スクールが、幼い子どもたちにとって、和やかで、喜びに満ち豊かところになり得るのだ(本稿での、レッジャーニは、レッジョ・エミリア市の幼児プログラムに関わる人々のことである。)レスリーと私が抱く「子どものイメージ」は、レッジャーニから学んだことに応じて、絶え間なく置き換えられている。その「子どものイメージ」が、子どもについての

自分たちの考え方を変え続けていくことに驚いている。

レスリーと私がわかってきたことは、レッジョ・エミリア・アプローチは理解しにくく、自分たちの実践に取り入れるのはさらに難しい場合があり得るということだ。私たちは、観察し、研究を続けながら、力強いイメージの新しく重要な特徴を探し続けている。それは、本当に楽しいことである。レッジョ・エミリア・アプローチは、幼児教育のあらゆる側面に対処し、特に、私たちが、構成主義の見方をしている場合には、私たちが既に解き明かしてきたことに重なる。それは、あたかも、別の惑星から眼鏡をかけるようなものである。その眼鏡をかけ、目新しい銀河系色の世界全体を見る。あなたは、この新しい色相と色合いについて、一体どうやって他の人に話し始めるのだろうか。このレッジョのレンズは、色の簡単な変換よりもはるかに複雑である。しかし、おそらく、その例えによって、レッジョ・エミリア・アプローチで、私たちのものの見方がおおいに変わるということが理解できるだろう。レッジョ・エミリアから学ぶことにより、私たちは新しい方法で見ることができるようになる。私たちはこの新しい方法を試し、それから、それをうまく使う方法を習得するために実践する。これは、いつきの仕事ではなく、一生の仕事である。

<sup>\*1</sup> 愛知県立大学教育福祉学部

<sup>\*2</sup> 愛知県立大学人間発達学研究科博士後期課程在籍

## レッジョ・エミリアの「子どものイメージ」

ペダゴジスタで、レッジョ・エミリアの幼児学校の代表でもあるカルリナ・リナルディ<sup>1)</sup>が述べたレッジョ・エミリアの「子どものイメージ」についての要約が卓越している。以下がその要約である。

実践、理論や調査に基づいた私たちの経験の根本理念を成すものは、「子どものイメージ」である。それは、たんに欠乏しているというよりもむしろ、資質豊かで、力強く有能な「子どものイメージ」である。子どもたちには、可能性、柔軟性、寛大さ、成長への願望、好奇心、ある種の不思議な感動（センス・オブ・ワンダー）がある。そして、他者と関わり、コミュニケーションを取りたい欲望がある。

子どもたちの、他者と関わりたい、コミュニケーションを取りたいという欲求や願望は、生まれたときから備わっている。そしてそれは、種の帰属意識と存続にとって欠かせない要素である。このことから、なぜ子どもたちは、大多数の表象言語の文脈の中で、自己表現したくてたまらないのか、なぜ子どもたちは、愛情を受けるだけでなく与えたいと思ひ、その愛情のあかしとして、交流し、相互に依存することを喜んで受け入れようとするのかということが、おそらく説明できる。以上が、真の成長を遂げる能力の基盤を築くのである……<sup>2)</sup>。

イタリアから遠く離れてはいるものの、私たちはレッジョ・エミリアから学んでいるので、意識して「力強い子どものイメージ」を発展させている。「力強い」は、子どもが強いということを言い表しているだけでなく、私たち自身の従来の考え方を克服するために、「イメージ」そのものが強くならなければならないことも示している。なぜ、私たちは、変化のプロセスに取り組まなければならないのか、その上、自分の変化した意識に基づいて行動しなくてはならないのか。それは、私たちが想像し、発見し、提示できる最善のものを子どもたちに与えるつもりだからだ。まずは、古いイメージを考察してみよう。

## 従来の「子どものイメージ」

私たちの周りに見える短絡的なイメージによって、子

ども用のほとんどのテキストやカリキュラムは構成されている。また、このイメージにおいては、子どもたちは、空っぽで生まれてきて、情報（主に事実）を十分に提供されることにより、世の中の様々なことに取り組むことができるようになると言われている。大学の課程では、教師は、子ども中心カリキュラムの指導を時々受ける。しかし、大人中心で教えざるを得ないことが自分たちの仕事であると頻繁に気づく。社会には、乳児や幼児は、明るい原色、アニメ、音がするプラスチックの玩具で刺激を与えられて楽しむものであるという考えが蔓延している。そして、プリスクールの子どもたちは、外部から動機を与えられる必要がある、そうでなければずっと遊んでいて、真剣に取り組むようにはならないと考えられている。幼児や児童に与えられる読み物は、中身の薄いものしかない。だから、理解しにくい著者の読み物で困ることはない。または、考えを求められるような読み物で、能力以上に背伸びすることもない。その短絡的な古いイメージによって、私たちは子どもをテストする必要があると思うのだ。例えば低学年であっても、私たちが子どもたちに言ったことを的確に記憶しているか、子どもたちがどれくらい優秀で、どれくらい従順であるかをはっきりとさせるためである。そして、これが子どもたちをテストする目的であるが、その結果、私たちは、子どもたちをお互いに比較して評価することができる。この古いイメージが暗示しているのは、多くの、必要な、こまごました情報（学問 academics）を子どもたちに流し込めば、子どもたちは満たされ、よい市民や勤労者になるだろうということである。

この従来のイメージは、製造工程からきている。これは、例えば、原料（子ども）を選び、商品ができ上がるまで、様々な工程（学校、スポーツ、行儀作法の授業）を経るというプロセスである。この視点で教育を見ると、教師がやるのは、教科書にあることを取り上げながら、製造、供給、遂行を監督し、管理していくことである。そして、子どもたちがどれくらい上手に、所定の教材を当たり前のように繰り返して使うことができているかを調べるために、子どもたちをテストしてみるのだ。

政府が承認している製造の「子どものイメージ」の結果として、教科書出版社、現在は試験製作者や試験点数記録係が、幼稚園から高校に至るまで、子どもたちに何

を教えるかを決めている。教師は操り人形になり、その糸は、教え方の台本が書かれた教師用指導書にコントロールされている。そして、その教師は、その組立工程の最後に、多様な集団の子どもたちを、同じようなもの、すなわち、事実情報で一杯になったクローンに変えようと努めるのだ。

## 子どもをより理解するために：レッジョ・エミリアの「子どものイメージ」

レッジョのイメージを例えるなら、19世紀の製造工程からではなく、農業からだ。そのイメージは、子どもたちを育てる庭の呼称であるフレーベルの「幼稚園」の正当な流れを汲んでいる。私たちにとっては新しいことかもしれないが、レッジョ・エミリアのイメージには古い起源があり、それは、プラトンの共和国にまで遡る。

一粒の種が蒔かれ、小さな植物がその内側に多くの必要な物質を含み発芽し、育つために、ほんの少しの資源（日光、水、たまに肥料や、荒れ模様の天気から保護するもの）を必要とする。庭師の役目は、植物のその時の成長の状態をよく知り、それに応えることである。植物が強くなり、熟し、健康に育つように、水をやり、保護することで植物を助けるのだ。

教師としての役割は、自分が見ていることに応え、子どもの成長を見守ることであり、子どもの成長を指導者として導くことではない。教師は、子どもたちの健康と安全を確保しているし、教師の教材や人材を利用する能力は、子どもたちの興味を支えているだろう。教師の役割は、最も尊重でき、中断が最小ですむ方法を見つけ出すことである。その方法によって、教師は、子どもたちの知的、社会的、感情的発達を支援することができる。

私たちが、4歳のサリーのことを見守り、自分たちの観察を通じてわかったことを考慮しているときは、彼女についてもっと多くを学び、彼女にとってよい人材になる方法を学ぶ。子どもたちを私たちのやり方に無理やり従わせようとするとき、子どもたちが、かわりに自身の申し分のないよい計画に従うことを好み、頻繁に反抗し、私たちの計画を妨害しようとすることに気がつく。

私たちの「気づき (mindfulness)」を高めていく必要がある。シルビア・ブアスタインは、「気づきとは、この

瞬間に起こっていることを知り、それに応えて自分に起こっていることをわかることである」と述べている。気づきによって、私たちは「子どものイメージ」を強化できる。またそのことによって、私たちはあらゆる人々を育てることができるようになる。

## どのようにして自分の力強い「子どものイメージ」を生み出していったか

私が教え始めたとき、私には、善意があり、子どもたちが好きであった。しかし、私には資質として不適切なところがあったため、教えるのに必要な技術を学ばなければならなかった。例えば、子どもたちの注意を引きたいときは声を低くすること、傷つけている子ではなく傷つけられた子どもにすぐに対処すること、子どもたちがいろいろ選べるようにすることなどである。私は、子どもたちと一緒にやっていくためによりよい方法を学んだので、職場で一番フレキシブルな教師として知られるようになった。だからといって、それによって、子どもたちを統制する私の手腕を妨げられることはなく、必要に応じて、子どもたちを安全に、健康に、お互いに礼儀正しく、後で子どもたちのプラスになるアクティビティに取り組むようにしておくことができた。私のクラスの子どもたちは、消防訓練でいつも建物から最初に出てきたものだ。

私が1992年にレッジョ・エミリアを視察したとき、私がそこで見たものが、私の最も深くに抱かれた価値に語りかけ、誠実さと真正性 (authenticity) を持って教えることへの新しい理解へ、私を導いた。なぜだかわからないが、おそらく私自身の辛い子ども時代のせいで、私は、子どもたちがどう感じているかということに、幸運にもずっと敏感のままである。私は、子どもたちから、その感情について、また、人々、特に両親、保育者、教師が、子どもたちの感情をどう支援し、はねつけるかといった深いメッセージを受け取る。

レッジョ・エミリアの視察の際に、私は、レッジャーニが、子どもたちの感情、行動や探究にとっても敏感であるということがわかった。マラグッツィ博士が私たちに、レッジャーニの仕事の根幹には、豊かで、有能で、完全で、そしてそれ以上のものとしての「子どものイメー

ジ]があると告げたとき、私には、この考え、つまりこの力強いイメージがわかり始めた。そして、自分が既に学んできた多くのことを一つにまとめようと思った。私が学んできたのは、子どもたちの前で、まるで子どもたちはどうでもよいかのように子どもたちについて話をしない、子どもたちを脅して活動に取り掛かせない、フェンスや丘の中腹により高く上るといったような、既に上手に子どもたちがやっていることを妨げないといったようなことである。私は、新しい方法で、直ちに子どもたちの声に耳を傾け、異なる方法で子どもたちを観察しなければならぬことを実感した。そのために、子どもたちがやれること、やりたいこと、考えていることが見聞きできるよう、注意を向け、耳を傾けなくてはならない。

レッジョについて聞いた頃は、自分の身体的な限界を感じていたこともあって、子どもたちに教えるという私の役目はほとんど終えたと思っていた。レッジョの取り組みに好奇心を持った私は、教室を視察することとなり、その結果、レスリーと知り合うに至った。レスリーは、レッジョについて学び始める以前から子どもたちに教えており、そして学んだ後も教えていた。私はより多くのことを学んできたが、「子どものイメージ」について学び続けるべきものは、常にもっとたくさんあるということを実感している。その「子どものイメージ」を学ぶことによって、子どもが空っぽであり、その子どもたちを満たすことが私たちの仕事であるという普及しているが間違っている考えに基づく実践を捨て去ることもできる。パム・オーケン-ライト（レッジョに学んでいる教師一訳者注<sup>3)</sup>の素晴らしい教室の視察中は、パムが幾度も子どもたちを助けようとする私をそっと止めてくれた。「親切な大人」の私が、子どもたちに提供することに慣れているので、無意識に説明しようとするのを止めてくれたのだ。私が、まだ（そして未だに）完全に依存している弱い「子どものイメージ」を払拭していなかったことは明らかである。パムが明確に理解しているからこそ、子ども自身の自然発生的な重要な学びのプロセスは、何ものからも妨げられることがない。パムは、一人ひとりの子どものために、その強く有能で立派なイメージを自分自身に育むための道を切り開いている。だからこそ、子どもたちは、深く自分たちの疑問を探究することができるのだ。

## 実際にやってみる

力強い「子どものイメージ」を垣間見るようになってくると、何人かは、子どもたちや自分たちのために、自分がそのイメージを持ちたいと決心するときがある。この新しい海域に足を踏み入れるのだから、子どもたちと一緒に生きるこの新しいやり方を探求したいと思う。それにも関わらず、しばしば、自分自身が、習慣的な解決策に立ち戻っていることや、始めようとする新しい方法を考案し、試みることにためらいがちなこと気づくのである。

## 標準でないと認識された子どもから学ぶ

力強い「子どものイメージ」を探求し始めるだけで、習慣的には問題だと見なされるかもしれないことが解決できる。レスリーは、オハイオの公立のクラスにおいて、深刻な障害を持つ子どもたちと一緒に、3~5歳の定型発達児を教えていた経験から次のような意見を述べている。

私は自問せずにはいられなかった。本当に、子どもが豊かで満ち足りて有能であると信じているのか、例外なくそうであると信じているのか。子どもたちがまだそうでないと見えるようなときでも、その信念を維持することができるのか。私は私が教えている子どもたちに目を向け、その本質（qualities）を見分け分析しようとする。ジェイコブの素質（*capabilities*）は何であるか。平凡な日々において、絶えず明らかになっている彼の能力（*competence*）がわかるのか。一人ひとりの子どもについてのこの思いが、私のベースライン、つまり、この子どもたちのイメージの起源となった。

教師は、一貫しない様々なメッセージを送ることを避けなくてはならない。私は、子どもたちを信じるという声を耳にしてきた。そう言ったにもかかわらず、その人は、子どもたちに覆いかぶさり、子どもたちに代わって多くのことを決めている。子どもたちを尊重すると言っておきながら、まるで子どもたちが何も感じないかのように子どもについて話す人もいるようだ。子どもが何回も首尾よくやってのけた、実際、自分でもうまくできるとわかっていることなのに、それをその子どもがすること

を禁ずる大人もいるようである。子どもに対するこの種の蔓延している軽視によって、私たちの観察は、歪み、惑わされ、曖昧になる。

ニーナは、かなり長い間、私の「子どものイメージ」の意欲を掻き立てる存在であった。ある週末、私たちは教室の様様替えをした。新たに配置された場所には、たくさんの透明の容器があった。その中のいくつかはガラス製である。そこには、おなじみの教具に加え、新しい教具もあった。月曜日に登園してきた子どもたちが、その部屋を見て驚いた。

ニーナは、身体協調や歩行に影響を及ぼす脳性麻痺を患った子どもである。そのニーナが、柵の方に歩み寄り始めた。ニーナにとっては、歩くだけでも一苦労なのだ。そんな彼女が、大変な努力をしてでも行きたいと思うに値する素晴らしい物を欲しがっているのを見て、嬉しくなった。彼女は、柵にたどり着いて、容器を一つ一つじっくり吟味した。私は、固唾を飲んで、ニーナが、ビーズがいっぱい入っているクリスタル・ガラスのカップに手を伸ばすのを見ていた。やっとの思いで、彼女は、カップを掴み、両手で抱くようにしてカップを持つことができた。彼女はとても喜んでるように見えた。そして、これを目の当たりにして、このグラスを全部排除するなんて、自分はどうかしていたのかという思いで、私はうろたえた。

ニーナは、胸にグラスを抱えながら、歩いてテーブルへ戻った。私は、そのグラスを持って、代わりに運んであげたいという衝動を抑えた。なにしろ、ニーナは脳性麻痺の4歳の子どもなのだからと思わざるを得なかったのだが我慢をした。ニーナは何ヶ月も私の生徒であったから、彼女が頼めば私が彼女を助けることをわかっていた。しかし、彼女は頼まなかった。レッジョ・エミリアについて書かれた読本から新しく知りえたことであるが、「全ての子どもが、豊かで、十分満たされ、有能であると本当に信じているか」と私の内なる声が厳しい調子で尋ねた。この子どもが、ガラスのカップをテーブルに持っていくのは自分の手にあまると感じるなら、その子はそれをしていないだろう。もし、私が力強い「子どものイメージ」を本当に持っているなら、そして、子どもが見せている自信を信じているのなら、その子の判断に従う必要がある。レッジョ・エミリアの考え方とともに

歩み続ける道を選ぶのであれば、私は子どもの有能さを信じなくてはならない。

ニーナは、最初の一步を、力を振り絞って踏み出し、悪戦苦闘しながら、ゆっくり、ごちなく、テーブルにガラスのカップを運んだ。彼女がテーブルにたどり着いたとき、チラッと私の方を見た。その目はまるで、「やったわ。やれるって自分でわかっていたの。私を信じてくれてありがとう。最後まで、割り込もうとか、助けようとかしないで、私を気遣ってくれてありがとう」と言っているようだった。彼女は微笑んでいた。ニーナを観察し、記録していくことで、私のイメージはより強く、より幅広くなっていった。私の新しい「子どものイメージ」ができ上がってきたので、ニーナを始めとする子どもたちは、それに従って行動するようになった。(ここまでが、レスリーのコメント)

### 子どもの成長を支援する

私たちが、力強い「子どものイメージ」を持つには、自分たちが、探し出し学んでいく責任を負わなくてはならない。子どもの現状の行動を見て、これから起こりうる行動を上手に想像することである。私たちが、ある子どもと一緒にいて、その子が何かを探究しているとき、私たちは、積極的に、その子を、その子の活動を、その子の人間関係を理解しようとしているものだ。子どもの選択を大切にする。自分たちが観察したことの詳細をじっくり省察することで、子どもを支援する自分の力量が向上し、また、費やした時間も報われるであろう。

私たちは、ある状況における自分たちの見方と、子どもの理解を並べようとする。そして、一致することを探す。私たちの見方と子どもの見方に違いがあるとき、なぜ子どもがそのようなものを見方をするのかを解明し、そのギャップを縮めるよう丁寧に支援していくことが、私たちの手に委ねられている。これについては、第3部でさらに述べる。

### 関わり合い：ボールを投げかけてみる

マラグッツィ博士の言葉によれば、「子どもは私たちにボールを投げかけ、私たちがそのボールを投げ返す。

そのとき、私たちは、自分自身の興味深い資源を加えている」のである。子どもたちは自分の興味というボールを、大人たちに向かって投げってくる。そして、その大人が、資源 (resources) を加え投げ返す。その大人は、資源が子どもの興味を伸ばしてくれることをよくわかっており、またその注意を怠らない人でなくてはならない。最初、その子どもたちは、自分たちの興味を惹くこのことについて知るべきことが、いかに多くあるかに気づいていない。その窓を開けるのは、大人たちの責任である。窓を開けることで、子どもたちは、学ぶことがたくさんあることがわかるようになる。そして、自分たちが最初に想像したことよりもより深く、幅広い知識に出くわしながら、興味のある物事に本気で取り組み関わるができるようになる。私たちが上手にそのボールを投げ返す場合は、私たちによって、子どもたちは、自分にとって興味深いことをもっと深く探究できるようになる。そのとき、私たちが、子どもたちを育成しているといえる。

## 子どもたちの 100 の言葉

レッジョの教育者たち (どこの保護者たちも) は、子どもたちが生まれた瞬間から、コミュニケーションを取る必要があることに気づいている。幼児には、両親の話し言葉でコミュニケーションを取ることが難しい場合がしばしばある。そこで、私たちは、子どもたちに、自分のアイデアを伝えることができるようになるために、もっと多くの方法 (「ことば」) を紹介している。この「ことば」とは、人間が、考えや感情を表現するために、発見し、発明してきた方法のことであり、そのいずれかの方法を使って、コミュニケーションをとることができるということである。このコミュニケーションをとる方法には、マラグッツィ博士が、「子どもの 100 の言葉」と呼んでいる以下のものが含まれているが、これに限定されるものではない。

- 会話
- 運動
- 描画
- 絵画
- 粘土細工
- 針金細工

- 演劇 (扮装を含む)
- コラージュ
- インストルメンタル
- 歌
- 踊り

レッジョ・エミリアでは、大人が子どもにある媒体を紹介する。その媒体とは、子どもがそれを深くじっくりと探究した後で、ある言葉になり得るもののことである。探究から言葉になるこのプロセスに敬意を表し、私はこのプロセスを「いじくりまわしによる探究・自由探究 messing about」<sup>4)</sup> と呼んでいる。一旦、子どもがその言葉を使いこなせるようになってくると、子どもは自分の考えを表現する手段としてその言葉を使うことができる。その子どもは、自由探究の段階から新しい言葉を自由に使いこなす段階に入ったのである。私たちが耳にしてきたのは、「ハンマーしかなかったら、あらゆるものが釘に見える」ということであるが、レッジョの考え方は、「ハンマーしかなかったら、もっと多くの道具を持てばよい。私たちがその道具を紹介しよう」となるのだ。

## 関わり合いが子どもと大人の双方にもたらす恩恵

子どもたちが教具に関わり、お互いに関わり合うことで、さらに深い探究のために必要と考えられる方向が、明らかになる。そして、それを通じ、私たちは、本物のリーダーシップや支援を発展させていく機会を得る。子どもの意図と教師の資源における対話は、個人的なものであり、タイミングよく、一人ひとりの子どもに合わせて行われる。その関わり合いによって、子どもと大人の双方が、充実し磨かれていく。おまけに、私たちが新しい力強い「子どものイメージ」を持ち、反応のよい先生として自身のスキルが向上することで、確かな根拠がない職務、決まりきったやり方での職務、または想像力のない職務によって生じる教師失格 (教師燃え尽き症候群) となることを軽減できる。時間の経過とともに、一日中ずっとボールを投げる方の腕だけを使うかわりに、教師は、子どもがボールを投げ返している間に、様々な筋肉を使うようになる。従来の教師の教え方は、教師が教室の正面にいて、子どもたちが学びたいはずだと思われることを子どもたちに見せること、つまり、一方的に提供

することだ。レッジョから学んでいる実践においては、教師の役割は、子どもたちが知識を構築するために使うことができる資源を引き出すこと、つまり、子どもの能力を引き出すことである。

レッジョ・エミリア・アプローチを理解し、遂行しようとする人々は、長期にわたって人間主義的伝統を持ち続けている。つまり、彼らは、批判的思考、探究心、探究心を育み、子ども時代の驚くべき素晴らしさに畏敬の念を抱いているのだ。これは、2011年当時、アメリカ合衆国における流行と、非常に多く対比されていた。当時のアメリカでは、「落ちこぼれゼロ法」<sup>5)</sup> や「頂上へのレース」、お膳立てされた授業を提供し、テスト対策の勉強を教える「耐教師性」のある教材（どの教師でも使える教材）の使用が流行していた。

### 子どもの意図を見抜く：観察、傾聴、探究！

子どもたちには興味の対象が多くある。日々の実践において、教師は、ある興味を子どもたちに持たせるものを何千もの中から選び出す。その興味とは、解決の難しさや可能性を含むものを見つけようとすることである。私たちが豊かな源泉のように見えるものを偶然見つけると、子どもたちの意図を掘り出そうとしてその方法を探す。それは、ある子ども、または少数の子どもたちにとって重要であると思われることを聞こうと、耳を澄ますことから始まる。ここでは、女の子のグループがお馬さんごっこをしてかなりの時間遊んでいることに気がつく場合の例を挙げる。

### とても魅力的な部分を見つけ出す

私たちは、次のようなことを見つけ出そうとする。なぜ、この女の子たちは馬が好きなのだろうか。速さや美しさがあるからだろうか。なぜ、女の子は馬に熱中しているのだろうか。「マイリトルポニー<sup>TM</sup>」の玩具には、これ以外の全てを意味するものがあるからだろうか。あらゆるところ、または文学やファンタジーの世界におけるヒーローが馬に乗って救出する、カウボーイが馬を投げ縄で捕まえ一網打尽に捉えるなどの、馬の登場場面で、私たちを魅了する力が馬にあるのか。馬には、人間がそうで

あるように家族があり、子どもたちは、自分たちの物語のいくつかを馬を使って演じることができるからだろうか。馬についての何が子どもたちにとって重要なのだろうか。一般的なやり方とはおおいに違い、私たちは、時間をかけて、自分たちがやろうとしていることについて前もって考える、つまり、十分先のことを考えてから行動することを、レジャーニから学ぶのだ。

マラグツツイ博士は、私たちはいつも最初に、100通りの予想される進行方向を考えるべきであると言った。つまり、私たちが後で子どもたちを観察するとき、子どもたちが本当に欲しいもの、私たちの候補リストの101番目かもしれないものを、自分がいつでも見分けることができるよう自分に準備をさせておくのだ。自分を含め、考え得るあらゆることのウェブ（蜘蛛の巣上に関連したアイデアを書き記していく一訳者注）<sup>6)</sup> をブレンストーミングすることが好きな人がいる。一方で、レスリーのような人は、リストやアウトラインを作る。自分ができる可能な限りの方法で、できるだけ多くブレンストーミングをすることは、自分を満足させる。しかし、重要なことは、子どもたちの心にはっきりと響くことを明確にするまで、子どもたちとともに進む次のいかなる歩みも見合わさなくてはならないということだ。

### 挑発について

挑発は、あなたを中に誘い込む扉である。挑発は、ひとつのアイデア、質問、行動であり、それによって、子どもたちは、そのテーマへもっと深く入っていく。挑発が、探究できるものももっとあるとわかるころ、つまり、初めはわからなかった深みへ子どもたちを動かすのだ。適切な挑発的な言葉を使い、私たちは子どもたちをその深さの近くまで連れて行く。そうすると、子どもたちは自分で探究し、より深く応えることができるのだ。新しい言葉、教具、驚きは、新しい思考を呼び起こす。

教師は、観察を通じて、子どもにとっての遊びの意味と役割を探究することができる。それによって、教師は、その遊びを広げ、深めることに必要とされることを決めるための質問や挑発する言葉を、磨いていくことができるのだ。私たちが焦りすぎて、すぐに遊びを広げると、子どもたちのアイデアや発想、計画を打ちのめすリスク

がある。そして、私たちが支援するつもりで考えていることさえ抑え込んでしまう。同僚の一人は、「本当に何度も、子どもたちが、自分たちの知っていることを私に言いたいと心から頼んでいるとき、私は急いでいたから、的外れなことを子どもたちにしていた。」と言う。レτζジョ・エミリアの「ドキュメンテーション・プロセス」によって、私たちは、注意深く正確に的を絞った応答をするようになる。その応答には、とっさに反応をするよりもその子の目的を達成させるさらに大きな可能性があるのだ。

いつ、あなたが、子どもをこのようなやり方で挑発したらいいか。ある子どもが広範囲の興味を示していたら、あなたは、その興味の正確な部分を探すのだ。つまり、子どもにとって重要な、注目されている部分を探す。

ときどき、観察をして、同僚と話をした後には、それ以上の挑発が必要ない場合がある。たとえそうでも、挑発できることについて考慮することは、計画を立てるのに役立つであろう。

生活から挑発される場合もある。5歳児であるアンソニーは、シャワーと子ども用プールだけしか水と触れる経験がなかった。だから、私が彼をスイミングプールへ連れて行ったとき、彼は新しいやり方で水に入ることに考え始めた。1年後、ジョージ・ワシントン・ブリッジを車で渡っていたとき、真下に見えるハドソン川に気づいて、車から大声で、「大きなスイミングプールがあるよ！」と叫んだ。たいていの旅の経験と同じように、身近なところから外の世界に出てみることで、子どももまた挑発され、今までの考えを変えるようになる。レτζジョの業績についてわかってくることで、自分が表面的に子どもたちを教えてきたと思うのなら、子どもたちの考えていることを挑発しようと努力することで、あなたの教え方は、より深みを増すだろう。手始めに、「最も有意義な結果になるために、どうやって、この話題を持ち出そうか」という問題をよく考えることが大切である。その結果として生じる挑発を、自身と子どもたちがより深い水域に入るために活用するのだ。

あるレτζジョ・プロジェクトにおいては、最初の実質的挑発は、子どもたちに、今日描いた絵と、昨日口頭で説明したことを比較させ、比較することで、より明確に違いがわかることを気づかせることであった。その結

果、子どもたちは、なぜ自分たちの絵が不十分だったのかをよく考え、説明したことを表現するために、どのような描画のスキルを学ぶ必要があるのかをリストアップした。この挑発によって、何週間ものカリキュラムが作成されたのだ！

挑発は、強力なツールのひとつである。他者が信じ理解していることを見つけ出すアプローチのひとつであり、レτζジョ・エミリアにおいては、子どもたちにもっと深く考えさせるために、しばしば用いられる。子どもたちと一緒に進みたい次のよい段階を探しているのであれば、子どもたちを挑発して、それが何なのかをあなたに言うことを試してみたいだろう。このやり方で考えることで、中身が濃く、満足のいく結果が得られる。

### 継続的な観察

パム・オーケン-ライトは、子どもたちの意図を明らかにする仕事を広範囲にやってきた。以下に、彼女のクラスと一緒に過ごしたときや、彼女が、「意図」についての自身のワークショップでサンフランシスコに来たときに、刺激を受けた多くの考え方の中のいくつかを挙げておく。

一旦、あなたが、注目すべきテーマ、つまり、子どもたちが深く関心を持つものがわかってきたら、次の段階へ移ることによって、子どもたちに資源を提供するようになる。資源とは、答えではなく、むしろ、子どもたちが理論を構築し、自分たちの答えを探し出すのを助ける質問や経験である。私たちの事例を挙げれば、お馬ごっこをしている女の子たちに馬を描いてもらうことかもしれない、または、馬と一緒にいる自分たちを描いてもらうことかもしれない。子どもたちがよく観察できるように、テーブルにプラスチック、セラミックまたは木製のミニチュアの馬を置くかもしれない。馬の家族について、または誰が馬に乗ったかについて質問するかもしれない。

子どもが作り出したのであろうと、教師が収集したのであろうと、これらの資源によって、子どもたちにとっての新しい発想や問いが養われ、さらなる探究が引き起こされる。おそらく、馬についてであれば、子どもたちが既に考えているものよりも、探究することはかなり異



なってくる。探究する馬は、騎士が私たちを救う、またはカウボーイやカウガールが平原を駆けるほどには空想的ではない場面で活動する馬だろう。

## 煩雑な実践

秩序の替りに混沌、綺麗に片付いている替りに散らかし放題、大人の制御の替りに子どもの制御が、いつも起きている。大人にとっては、積極的に自分で物事を決めようとする子どもや、面倒なことをしようとする子どもを支援することは、大人自身で物事をコントロールし、カリキュラムを取り扱うことより、いっそう難しい。しかし、それから得るものは、もっともっと大きいものである。教師に、貧しく空っぽな子どものイメージがあり、秩序を保ち、カリキュラム通りにすることが教師の第一の目標であるなら、結果的に、煩雑さが伴う探究をすることや、未知の方向に展開することはさせてもらえないだろう。しかし、教師の主な目的が、有能な子どもたちの、自己表現し、理論化し、自分の興味を惹く物事を調査する力の豊かな成長を支援することであるなら、創造性を支援するために、一時的に、整然さ、きちんとした整然としている特性が犠牲となることもあるだろう。レッジョ・エミリアでは、カリキュラムに沿って目的を達成することを「プログラミング」と呼び、目的を表現し、調査することを「プロジェクトング」と呼ぶ。自分たちの時間と労力を注ぐことを選んで、後者の可能性を探究し追いかけるのだ。この詳細については、プロジェクトの章を参照のこと。

## 早まって答えないこと

私の最初の本である「The Sun's Not Broken, A Cloud's Just in the Way: On Child-Centered Teaching」の話の中で、暗くどんよりとした天気がずっと続いていたとき、ハミドが「太陽が壊れちゃったの。」と尋ねてきた。「そんなふうを感じるのね、ハミド。でも太陽は壊れていないわ、雲が塞いでいるだけよ。」と私は答えた。彼は、立ち去ったが、見たところ満足そうであった。さて、それをよくよく考えてみると、私たちが、親切で、役に立つように見えるけど、新しい力強い「子どものイ

メージ」を忘れていたので、このような答えを提示することは、残念ながら、そのとき私がやった通り、議論を終わらせてしまう。私は、そうすべきだったのに、ハミドが、自分の気象変化の理論や自分の理解を構築できる機会を与えてやらなかったのだ。

大人が、子どものリードに従い、それから挑発や資源を提供することを学び始めると、私がハミドにやってしまったように、すぐに答えに向かいがちである。最初は、子どもたちのより深い意味を探る方法がわからない。大人は、まだまだ聞くスキルを磨かなくてはならないのだ。私たちは、まだ、子どもたちに返す質問を示す最適なやり方や、黙らせるかわりに対話を始める最適なやり方を学んでいない。私がそういうことであると知っていたら、私はハミドに「本当に壊れたと思うのね。それについて考えさせてね、そしてあなたも考えてみてね。後でまた話をしましょうね。」と言うことができたはずだ。そして私は、太陽が壊れたと思った理由を明らかにするアイデアを持って、後で彼と対話しようと、ハミドの前で、自分に対するメモを書き留めることくらいしてもよかったはずだ。彼は、壊れている機械に例えていた。それは、彼の社会でよく聞き覚えのある例えだった。ボールを投げ返していたら、私は、物が壊されるという以外に、カーテンの後ろに隠されるとか、バッグの中に入れ込まれるとかに例えることで、物が消えるという考えを彼が探究するのに一役買うことができたはずだ。その後彼は、別の理論を構築する方向に進むことができた。その理論は、機械よりもむしろ自然に基づくものであった。私たちがお互い考える時間をとった後で、議論を再開していたら、私たちは、全く異なる旅路をたどっていたであろう。

## より長く耳を傾ける

ペニーが質問してくると、「彼女は私に聞いているのか、それとも自分に問いかけているのか。」と自問してみる。もし、彼女が私に聞いていなかったら、その会話に立ち入るべきでないが、さらなる情報に聞き耳を立てていると、後で彼女が私の助けを必要とした場合に、彼女とともに考えていくことができる。

どのようにして、私は子どもたちが自分のアイデアを

探究するのを支援するのか。私は、教具を設置し、新しい経験を提供することができる。そして、もし、子どもたちが行き詰まる、興味を失う、挫折をするなら、次には、お互いに交わした言葉を、子どもたちに繰り返してもう一度言うことができる。例えば、「ペニー、昨日あなたが私に、どうやってこの粘土を立たせることができるのかと尋ねたことを覚えているかしら。」という具合である。この言葉を使って、私は、ペニーがもともとやろうとしていたことへ彼女の気持ちを戻そうとする。彼女が探究し、試してみたかったことを私に理解させるように勧めてみるだろう。私の目的は、ペニーの興味を実現させるように支援することであって、私自身にあるわけではない。

少し長めに聞いて、ペニーが言った言葉をそのまま本人に繰り返して言う練習をすること。確実にお互いの言葉や意味を理解すること。さもないと、驚くほど無意味な結果になる可能性がある。私たちはみな、このような出来事を経験し、フィリス・ポーターによってレッジョのオンライン・ディスカッショングループに報告してきた。

例えば、次のような報告があった。虐待を受けていた6歳の女の子が、法廷で証言することを求められた。彼女の弁護士が、彼女に、陪審 (jury) が何であるか、つまり、陪審 (jury) の意味を知っているかを尋ねた。その小さな女の子は、はい、本当に知っていると言い張った。最終的に、何が陪審 (jury) であるかを尋ねると、それは、弁護士が、手首につけ、首に掛けている物 (jewelry, 宝飾品) であると説明したのだ。

子どもの意図を見つけ出そうとするときは、混乱させられる可能性があることに留意すること。そして尋ねることを厭わないこと。事前に意見を聞かずに、ただ何かを提供するだけではない。例えば、こんなことを聞いてみよう。「スカーフをすれば、もっと上手に踊れるようになるかな」、「このプロジェクトは、屋外でうまくいくかな」、「もう一度、それ (写真、ビデオ、鳥の巣、馬の玩具など何でも) を見たかったのかな」

## ラウラ (ローラ) から学ぶこと

カルナ・リナルディはしばしば、ラウラと腕時計の写

真を使って、「子どものイメージ」の論じることから始める。4枚の写真を、一枚ずつ、聴衆に見せていく。1枚目の写真には、保育者と一緒に席についている12ヶ月の乳児が写っている。その乳児は、カタログか雑誌の見開き2ページに載っている腕時計の写真を熱心に生き生きと見ている。2枚目の写真では、保育者が、乳児のところに手を伸ばして、手首につけている実物の腕時計を見せている。その乳児は、全神経を集中してじっとこの時計に見入っている。3枚目の写真では、保育者が、乳児の耳に時計を当てて、腕時計のチクタクという音を聞かせている。(若い読者が忘れてならないのは、デジタルの音のしない時計が使われるようになる前の、80年代の時計は、このような音がしていたということだ)

私が、ワークショップのグループに、この写真を見せるときは、3枚目の写真で見せるのをやめて、参加者に、次に起こると思うことを別の参加者にそれぞれ話して欲しいと言う。必ず、次のことが当然のこのように起こる。参加者が、お互いに自分の見解を共有し合う時間をとった後で、私は4枚目の写真を見せる。その乳児は、自分の耳を雑誌に押し当てて、雑誌の腕時計もチクタクと音がするのかを確かめているのだ。

いつものことであるが、この写真を見ると、聴衆はハッと気がつく。そこにいるほとんどの人が、私がこの4枚目の写真を見せるまでは見当がつかないのだ。「ラウラは腕時計を口に入れるだろう」とか「腕時計をつけようとするだろう」のようなことを予測した人は、ラウラをひどく過小評価してきたと実感する。ラウラは、12か月の乳児でありながら、仮説を立て、それを検証している。ラウラは、「もし、手首についている腕時計がチクタクと音を立てるのなら、多分、雑誌のページに載っている腕時計もチクタクと音が立てるのではないか」と考え、自分のその仮説を検証するために、耳を傾けているのだ!

4枚全ての写真を見てしまうと、たいいてい人は、ラウラが高度で知的な分析ができることに感激する。ヘンリー・デヴィッド・ソローが述べたように、「その状況を見るのではなく、その状況を理解する」のだ。ラウラがその腕時計を当然口に入れるだろうと予期した人たちは、まるで自分たちが考えたことを正当化するのに十分な言い訳であるかのように、しばしば、「だって、それがこの赤ちゃんの今の発達段階だから」と言いたがる。最

最終的に、多くの人が、子どもたちを、その年齢集団の代表としてだけでなく、ひとりの人として、もっとはっきり捉えようと心に誓う。

私は、このとき心に誓った人たちに、教科書から学んだ発達段階の一般化された知識に基づいてラウラを見るのではなく、ラウラ自身を見て、ラウラに関する事実気づいてもらいたい。私たちは、目の前のその子に敬意を表し、注意を向けなくてはならない。そして、決して抽象概念や一般論だけに依存してはならない。ドキュメンテーション・プロセス（第2部参照のこと）によって、私たちは、その場での即時の反応するよりも、その子どもの目的を叶える可能性がより高く、もっと心を配り、的を絞った応答をするようになる。

私たちの目的は、子どもが活動を続け深めていくことができるよう支援することである。私たちが望んでいるのは、子どもたちの遊びがもっと複雑になることであり、子どもたちが、物事を調べ、物を生み出す経験することである。そのために、時間と熟考を必要とする。このプロセスを支援する方法を探すから、私たちは、より慎重な聞き手になることができるのだ。子どもたちの遊びは、自分たちの理論やアイデアを探究できるように励まし、後押しされることで深まる。その遊びの深まりによって、私たち大人も、子どもたちの考えていること、例えば、理論、アイデアやプロジェクトをどのように整理し取り組むかといったことを、理解し支援する力を伸ばすことができる。それと同時に、子どもたち自身が自分たちの持つ潜在能力（capability）をますます理解し認めることもできるようになる。一番重要な問題は、私たちが、4歳児の関心や今現在考えていることをどのように解釈するか、そして、子どもがその関心やアイデアを次の段階に進めることができるように、どう支援をするかである。

## 状況次第

ある子どもの学びの足場づくり<sup>7)</sup>をしたいとき、レッキーニは、習慣や伝統に戻るかわりに、今起きていることについての情報を集める。この情報を「データ」という。視察者の「どうやってデータを集めるのか」という質問に対し、レッキーニは、しばしば「状況によ

る」と答える。それは、文脈依存のやり方である。このやり方は次の通りだ。特定の関心事や特に興味深いこと、得ている理解やまだ残された混乱を把握する。そうでない場合は、その日の様子がどうであったかに目を向ける。その方法として、まずは、写真を撮る、子どもたちの会話を録音するなどしてデータを収集する。収集したデータから、自分たちが気づいたことを考察し議論する。これは、その気づきから見えてくることや発信されていることを理解するために行う。同様に、子どもたちが言ったこと、生み出したものを再考察する。子どもたちにそのデータを見せるか、読み聞かせる。それに応じて子どもたちが言うことから、さらにデータを作りあげていく。同僚と協力し合って、繰り返し対処していく。以上の取り組みを通じて、理論と分析が明らかになってくるのだ。この情報を収集し、子どもたちや他のスタッフとそれを再考察し、その結果に基づく活動を計画することにより、子どもたちに最善を尽くすことができることを、レッキーニは見出してきた。このプロセスをよく知らないと、毎回気持ちを切り替えて時間を作り、新しいやり方に変えてみたり、取り入れたりするのに必要な技術を開拓しなくてはいけない。

私たちは、実のところ、ドキュメンテーション・プロセスの対象を「子どものイメージ」を変える対象から切り離すことはできない。前者の実践なくして、後者を何とかすることはできない。この本の第2部では、データの収集方法や、体系化された子どもたちの研究の一部として、そのデータを省察するやり方、そして、子どもたちの目的に向かって子どもたちが一歩ずつ進めるように支援する方法について述べる。

力強い「子どものイメージ」から逸れてしまうことが多くある。特別なニーズを有する<sup>8)</sup>子どもには、ある一定のスキルがないことがわかっている。レッキー・エミリアの力強く、十分なイメージは、その子どもたちにも有効であるだろうか。レスリーは、自身の経験から、それは有効であり得るし、またそうであるに違いないことを学んできた。私が、オハイオの彼女のクラスを視察したとき、特別なニーズを有する子どもたちが、自分たちを制限する状態から抜け出る道を探し、境界を変えながら、充実した人生を得ようとしている姿を見た。その子どもたちは、自立する準備をしているように見えた。

第2章では、それがどうなったか、ある事例について述べる。

(原 明子・山本 理絵)

### 〈著者注〉

1) Carlina Rinaldi は、マラグツツイ博士(レッジョ・エミリアの学校を指導し息を吹き込んだ教思想家 1945-1994) によって考案された役割(市全体の乳児保育所及び幼児学校を指導するペダゴジスター訳者注)を務めている。

2) 『子どもたちの100の言葉』からの引用。

3) バージニア州のリッチモンドで幼児教育に携わっているオーケンライトとは、レッジョオンライン討論グループ上で知り合った。私は、幸運にも、彼女の教室を7、8回ほど視察する機会を持つことができた。私はいつも彼女から、レッジョで学んできたことに深く根ざしている熟練した教育について、多くを学んだ。

Oken-Wright, P. (2001). "Documentation: Both mirror and light." *Inovations in Early Education: The International Reggio Exchange*, Vol. 8 No. 4.

4) このすばらしい言葉は、1960年代のイギリスの幼児学校運動からきている。それは幼児の選択をその教育の中心にすえた、広く普及している素晴らしい試みである。

Weber, L. (1971). *The English infant school and informal education*. NJ: Prentice-Hall.

"Plowden Report" *Children and their primary schools: A report of the central advisory council for education*. London: Her Majesty's Stationery Office, 1967.

5) その背景には、画一化を命令したり、教師を台本通りに動かしたり、とても頻繁に子どもたちに高いレベルのテストで競争させたりする、似非科学的な、そして恥ずべき合衆国の法律(2002年)があった。

6) 視覚的な援助。これは、自由な枠組みでテーマをリストアップし、中心点に結びつくアイデアへつながる。この場合は馬であり、もっと多くの情報をグーグルの「curriculum web」から得ることができる。

7) 足場づくりは、ヴィゴイツキーと結び付けられる言葉で、より熟達した仲間や大人から、学習の一部をまだ十分に自分で進めることができない子どもへ与えられる援助のことを示している。より考えが進んでいる人の学びは、あまり考えが進んでいない人が新しい考え方ややり方を探究するときによって立つ場所(したがって、足場)を提供する。

8) 特別なニーズを有する子どもを、レッジョ・エミリアでは、特別な権利を有する子どもと表現することは印象深い。

### 〈解説〉

本書は、20年以上前からレッジョ・エミリア・アプローチを学んでいる Sydney Gurewitz Clemens と Leslie Gleim が、保育者のために書いた本である。主な著者

Clemens は、early childhood curriculum and supervision の修士をもち、保育者としての30年以上の実践経験があり、その後 Pacific Oaks College に数年間勤務し、また各地で大人のためのワークショップやセミナーを行ったり、専門誌に論文を載せたりしている。NAEYC (National Association for the Education of Young Children) でも活躍されている。単著には、次のようなものがある。The Sun's Not Broken, A Cloud's Just in the Way: On Child-Centered Teaching. 1984. /Centering on the Children. 1985. /Pay Attention to the Children: Lessons for Teachers and Parents from Sylvia Ashton-Warner. 1996.

『ニューズウィーク』誌にレッジョ・エミリア市立ディアーナ幼児学校が「世界で最も前衛的な幼児教育施設である」と発表されたのが1991年であるから、その直後から彼女はレッジョ・エミリア市の幼児学校を何度か訪れ、この教育実践の創始者であり教育学者であるローリス・マラグツツイとも会っている。共著の Gleim は、Educational Leadership の修士をもち、特別支援教育を学び、本書が書かれた当時、特別ニーズをもつ子どもが多いオハイオ州で学級担任をしており、その実践が掲載されている。また、Clemens は1996年から、Gleim は2001年からレッジョーL・オンライン・ディスカッショングループの議論に参加している。

本書は、実践経験のある著者らにより実践家向けに書かれたものである。所々に子どもの姿や実践事例をあげて説明してあり、レッジョ・アプローチについて具体的イメージをもって理解することができる。レッジョ・アプローチの取り入れ方については、それぞれの国の文化や環境の違いによって、自分たちのやり方と照らし合わせ、捉え直し、自分たちのやり方を探究することが重要だと述べている(本書のはじめに及び「レッジョ・エミリア・アプローチ入門—世界の最先端を行く幼児教育から学ぶ」愛知県立大学生涯発達研究所『生涯発達研究』第7号 2015 p 36. 参照)。

著者 Clemens は、まず、実践の基本原理・子どもの捉え方として「子どものイメージ」について1章で述べている。レッジョ・エミリア・アプローチというと、プロジェクト活動が強調されがちであるが、それはレッジョの一部であり、またそれをたんなる技術として捉えるの

ではなく、その根底にある子ども観・子どもの捉え方が重要である。著者は、豊かで満ち足りていて力強く有能な子どものイメージをもつことが基本だと考え、1章では、このイメージとらえ方について探究している。

著者は、この「子どものイメージ」に出会って、感銘を受けているが、それまでの空っぽの子どもに情報を一方的に注ぎ込むような「古い子どものイメージ」から「新しい子どものイメージ」に転換し、それを身につけて実践できるようになることは簡単なことではなく、著者本人もジレンマを抱え自分の実践を反省しつつ、新しい「力強い子どものイメージ」を説明している。

このような子ども観をもって実践する場合、大事なことは、まず子どもをよく観察し、ドキュメンテーションの過程の中で、子どもを理解しこれから起こりうる行動を想像・予測すること、子どもの選択を大切に、観察したことを省察することである。たんに自然発生的な子どもの活動に任せるのではなく、子どもの声に耳を傾け、子どもたちの興味に応じて、「資源」を提供し、子どもの意図と保育者との対話によって、子どもに気づかせながら、もっと深く探究できるようにするのである。

著者は、このような保育者の働きかけを「挑発 provocation」という概念を用いている。この言葉は、日本語では少し強めの印象があるので、「誘発」「誘いかけ」などの訳の方がよいかもしれないが、一般的な訳として「挑発」とした。保育者が、観察・ドキュメンテーションによる省察をもとに、質問したり言葉をかけたり、行動することによって、子どもたちを刺激して遊びを広げ、深い探究・深い思考を呼び起こすということである。年

齢の一般的発達にとらわれず、一人ひとりの子どもが興味をもっていること、子どもたちの写真、会話の録音などのデータを集め教員間で議論すると同時に、子どもたちにそれらを見せて、子どもたちにも考えさせることが必要になってくる。プロジェクトが最初にあるきではなく、このような過程で、プロジェクト活動が立ち上がってくるのである。

ここで述べられているような子どもの捉え方と保育者の基本的な姿勢については、日本の保育においても、それほど異論はないであろうが、具体的な保育場面においては保育者は判断や行動に迷うことが多く、放任してしまったり指示しすぎてしまったりしがちである。また、真の意味でドキュメンテーションに取り組んでいる園はまだそれほど多いとはいえない。本書で紹介されている実践事例を参考に、個々の保育実践においてさらに議論することによって、子ども観・保育観や指導原則について深めていく必要がある。(山本 理絵)

## 付 記

本章の一部は、愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士前期課程の2014年度の授業「保育援助論特講」でも臼井麻由美、鈴木ゆかりらと討論した。また、第1章後半部分については、後期課程院生の浅田明日香らと討論した。その上で、原明子が改めて第1章全体を翻訳し、山本理絵が修正加筆した。

なお、著者には、日本語訳公開の許可を得ている。